フェアトレード

ブラジル移民百周年におけるコーヒー論究

日本フェアトレード委員会　　理事長　清田 和之

フェアトレードは、理念と運動の側面、ビジネスの側面がある。しかし、実際にビジネスとなるには、難しい。「フェアトレードの理念はいいが仕事にならなければ、飯を食えない」と言う声が聞こえてきそうだ。私自身これまでその実現には困難を極めている。

たしかにそうだが、そこで、理念を掲げながらビジネスや事業が生まれ、生活できる事業家、起業家が生まれたら、そして雇用も広がり、フェアトレード自体もっと広がる、という気持ちを奮いたたせながら、やはりがんばって行こうと毎年年賀状に書いている。もちろん今年も書いたが、今年はそれに専念する覚悟を書いた。

それは、途上国と言われるスリランカに行けば行くほど、フェアトレードを求められるからである。私はビジネスにならないからと言って、フェアトレード実践をあきらめるわけにはいかない。南の国の農業従事者からの悲痛な訴えが聞こえるようになるので、やはりフェアトレードの実践をして成功することを目指している。

1　どうしてコーヒーフェアトレードなのか？

南の国の生産地側からコーヒーを見ると、コーヒーの陰で泣いている人たちが多く存在する。2002年のコーヒー危機の時と言われた年は、コーヒー生産に関わる2500万人の人が貧困の惨状にさらされた。南の国の人の農産物として、多くの人々が生産に携わっているのがコーヒーであり、生活のよりどころにしているのがコーヒーである。

2　フェアトレードとは何か？

私自身のこの間のフェアトレード運動を再度点検し、現在の到達点までの歩みを確認する。

I. コーヒーのフェアトレード

■コーヒー価格の暴騰と大暴落

フェアトレードとは、南の国との公正貿易と言われるが、その具体的な内容はどんなものか、まず知ることだと思うが、コーヒーは北の消費者にとっては、海を隔て南の国に存在し、しかもコーヒーは高地にあるので、コーヒーを見るにもそこまで、出かけなければならない。また、コーヒー農園に行ったとしても、そのコーヒー生産者の実像を知ることは、言葉の壁、生活まで覗くのは、非常に困難で、コーヒーを幾らで売った、幾らの賃金を払った、生活の状態など聞く機会はあまりにも少ない。

Brazil(ブラジル)ICO資料　ポンド/セント アラビカ　ニューヨーク市場

	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
1996	102.93	118.56	114.21	105.28	112.58	97.04	78.20	79.25	86.91	86.47	86.84	87.88
1997	114.21	139.42	155.65	157.13	**173.06**	158.17	130.80	143.47	150.61	136.31	135.39	150.72
1998	162.11	159.49	133.33	125.89	105.37	88.36	81.05	84.71	77.42	76.65	79.15	89.47
1999	85.62	71.28	73.73	71.40	80.81	77.10	67.20	61.89	57.76	63.10	82.20	96.71
2000	89.44	80.15	80.57	74.68	72.52	63.80	60.91	56.36	55.26	56.34	53.32	48.02
2001	47.41	44.04	44.30	39.30	41.87	39.04	35.05	33.15	29.79	26.19	30.97	31.34
2002	32.03	31.59	35.24	36.09	30.51	27.45	25.60	**24.78**	27.91	30.05	35.19	34.35

（表１）

コーヒーは簡単に言うと、生産者がコーヒーを栽培し、加工調整され、コーヒー生豆として、生産国から船で港から消費国に輸出される。そして、消費国では、その生豆ではコーヒーとして飲めないので、コーヒー企業は焙煎という作業をして、消費者のもとにコーヒーを届ける。そのコー

ヒー生産者から消費国にわたるまでに、大きな不公平のシステムが存在する。
そこで、フェアトレードを学ぶには、北のコーヒー消費のコーヒーの美味しい飲み方を論ずるのでなく、南の国のコーヒー生産者側からの貿易のあり方、そしてコーヒーの栽培、収穫するコーヒー生産労働者、そこで働く人たちの暮らしなど知ることが、フェアトレードを学ぶことになる。
昨年12月にフェアトレードの勉強会で、九州の有名な大学の学生が、「大学の卒論のために、フェアトレードについて勉強しているが、概念的なことばかりで実践や実際のところが見えない」と言っていた。まったく私も同感である。
私のフェアトレード実践に立ち上がるのは、1997年と2002年のブラジルコーヒー訪問である。（表１）ブラジルアラビカコーヒーにあるようなコーヒー価格の推移表がある。1997年高騰と2002年は大暴落価格のあったブラジルコーヒー農園を訪問したのがきっかけで、フェアトレードを始めたのである。
フェアトレードとは何か？私自身、これまで「フェアトレードの言葉」さえ知らなかったが、「フェアトレードの言葉」の出会いから、南の国のコーヒー生産側に立って、考えてみたい。私のフェアトレードに至る過程は、ブラジルでのコーヒーの出会いであるし、もう一つは、日本人移民がコーヒー労働者であった事実を知った時から、フェアトレードの私自身の思想のバックグラウンド形成がなされていった。
現在スリランカフェアトレードコーヒー実践を始めているが、そこでも、同じように紅茶園で働く人々を知った。彼らの祖先は、以前虐げられ、他国から強制的労働のために、移住を強いられた人々だった。そのスリランカでフェアトレードの実践の端緒についていることを実感しながら、私のフェアトレードについて述べたい。

■コーヒー農園の労働者不足

私は1997年ブラジルのコーヒー農園に行ったとき、ブラジル日系人移民は、コーヒー農園の労働者だったことを知った。さらに2002年にブラジルコーヒー農園訪問からフェアトレードを知った。1997年はコーヒーの高騰、2002年はコーヒー危機が生まれる最大のコーヒー価格暴落の年だった。その2回の訪問は、私にフェアトレードが自分の原点になった。
1908年6月18日ブラジルサントス港に、日本人移民は到着してから、日本人のブラジル移民は始まるが、そのほとんどはコーヒー農園で働く契約移民だった。すでにそのブラジルには、その前からヨーロッパからの移民は多くいたが、1850年頃からポルトガル、イタリア、ドイツ、スペインの国々からだった。日本人移民が始まる前までに、すでに200万人を超える移民はやはりコーヒー労働者であった。
ブラジルに移民受け入れの背景の一つは、コーヒー農園での労働力不足を充足するためである。1800年代からヨーロッパを中心に、コーヒー飲用が一般の人にも始まり急速なコーヒー需要があった。一方その需要にこたえるため、広大なブラジル土地を利用し、コーヒー栽培の農園が開かれ、コーヒーはブラジルの基幹的産業となっていた。
そのコーヒー農園を産業として支える労働力は、最初はアフリカから連れてこられた、主に黒人奴隷であった。ブラジル国内経済産業におけるコーヒーの比重は年々高くなり、ブラジルの1900年代初め、コーヒー輸出はブラジル総産業輸出の50％を超えるまでになっていた。ブラジル外貨獲得における経済に占めるコーヒーの位置は大きかった。
ブラジルでは、コーヒー農園開拓や栽培に1850年までにブラジルに売買されてきた奴隷は、171万人以上を数えた。ブラジルでは1850年に黒人奴隷貿易禁止、そしてやっと1888年奴隷制度が廃止になり、このブラジルの奴隷廃止により、300年間続いた世界史的奴隷制に事実上終止符が打たれた。
そのような時代的背景もあり、黒人奴隷の労働に頼っていたコーヒー生産は、これらの禁止措置により、労働者不足となり、コーヒー園の労働力確保が急がれることになった。
そのような黒人奴隷の廃止、一方ではコーヒーの需要の高まり、ブラジル国内事情は、個々の

生産農園でなく、広くブラジル政府として、コーヒー生産労働者の確保が急がれていた。そこに日本からは移民として送り出す側の事情もあった。それは日本国内の貧困では明治の人口過剰などの背景もあった。

そのような背景のもと、ブラジル移民の象徴である第一回笠戸丸移民は、数百年続いたブラジル奴隷制度が廃止されてから、まだ20年しか経っていない1908年時のことである。

100年前のブラジルコーヒー農園で、日本人移民を待ち受けていたのは、大変な生活や労働ばかりだった。食事事情、住むところは馬小屋のようなところ、奴隷制度の雇用慣習の名残もあり、移民に取って耐え難いものであった。

移民に行く前の日本で、コーヒー農園でお金持ちになるという話を聞いて、それを信じてブラジルに来た。コーヒー収穫から受けるはずの収入は、行く前に日本で聞いていたのと大違い、みんな騙されたと思ったのも当たり前だった。

そのブラジルコーヒー農園は、黒人奴隷労働の慣行で日本人移民にも、朝早くからの重労働、そしてピストルを持った監視人、鉄の足首の鎖や奴隷売買の焼印はないにしても、「奴隷労働」といってもおかしくないような「移民労働」であった。「コーヒーで一稼ぎ」などは遠い夢の話だった。

■夜逃げするコーヒー移民

現在日本は40カ国以上の国からコーヒーを輸入しているが、その中でも輸入量が一番多い国は、ブラジルコーヒーである。そのブラジルコーヒーは日本では、100年前のブラジル移民が始まる前には実際に輸入されていなかった。ブラジルコーヒー輸入は、ブラジル移民が始まった後からであある。

ブラジル政府は、ブラジルコーヒーを日本に普及するため、笠戸丸移民の4年後の1912年からコーヒーを毎年1500俵5年間にわたり、日本に無償でコーヒーを供与した。東京銀座のコーヒー・パウリスタが日本で普及の役を務めた。その立役者は第1回移民船笠戸丸の皇国殖民会社社長の水野龍であった。

その意味でもブラジルコーヒーの日本への普及は、笠戸丸からのスタートとも言える。しかし、日本にコーヒーが飲まれ始めた時に、移民のコーヒー農園での生活は悲惨であった。

夜逃げせし　移民思ふや　枯野星　　上塚周平

つい先日山崎チズカ監督の1980年に完成した「GAIJIN　自由への道」という映画を見た。その映画では、コーヒー農園での日系人移民の生活が描かれていた。農園で働く移民家族が監視人の目を盗み、夜逃げする映画であった。

コーヒーが日本に普及する前、地球の反対側の遠いブラジルに行った日本人は、そこで初めてコーヒーを知ったが、そこでは、過酷な労働、非人間的扱いのコーヒー農園を夜逃げした日本人の移民は、亡くなったり、行方が分からなくなった人も数多くいた。

東京銀座のパウリスタは、明治、大正に活躍した文豪や著名人が多く訪れたコーヒー喫茶店であるが、そのような彼らでも、地球の反対側でのブラジルコーヒー移民の悲惨な出来事について知っていたであろうか。

戦後に行った移民の人が「清田さん、考えてみてください。祖国から離れ、移民となって、よその国に行こうと決めるのは、10倍は稼げると思ったからで、3、4倍では外国に行って働く気持ちにはならないですよ。」と言った日系人移民の言葉が思い出される。

100年経ったとき日本人移民の心、状況、日本の背景、移民に行く人の生活、歴史を考えてみると、人が祖国を離れるということは言葉で表せないよほどの思いだったろう。

もちろん、ブラジル移民のすべてが生活や経済的動機で行った人ばかりではないが、コーヒー農園で働くことを義務付けられ、契約移民の多くは「お金のなる木がコーヒー」と思いブラジルにいったのである。

■移民の前のコーヒーは、アフリカ黒人奴隷だった

コーヒー移民の前のコーヒー農園での労働は、アフリカからの黒人奴隷だった。サルバドールはアフリカ黒人を奴隷として受け入れたが、それではどこから送られたか。世界遺産の本をめくっていたら、2003年7月までの世界遺産登録が754件とある。ユネスコ世界遺産とは、世界人類の文化や地球の自然の「大切な宝物」で、日本では日光の社寺、古都京都、奈良法隆寺、厳島神社など他にもいくつかある。

その世界遺産の本に「あれ」と思うページがあった。それは「人類過ちの記憶　負の遺産」と見出しがある。

『世界遺産は本来、人類の文化や自然を「大切な宝物」として未来に引き継いでいこうものである。しかし、戦争や奴隷貿易など負の記憶を留める世界遺産に登録されている。』（世界遺産・小学館刊）そして5つの負の遺産として「日本の原爆ドーム、アウシュビッツ、タリバンに破壊されたバーミヤンの東大仏、アパルトヘイトで有名なネルソン・マンデラ元大統領も収容されていた黒人専用の人種差別の象徴ロベン島、そしてセネガルにあるアフリカの黒人を送り出した「黒人奴隷悲劇のゴレ島」が載っている。

おりしもニュースでルラ・ブラジル大統領が2005年4月14日セネガルのゴレ島にある「奴隷館」を訪れ、「ブラジルが過去に黒人奴隷を労働力として利用した歴史を謝罪した」とあった。ゴレ島は黒人奴隷を世界に運ぶ拠点だった場所で、ブラジルは一番多く黒人奴隷を使っていた国で、それは世界の最大のコーヒー産地のため、最も多くコーヒー園で働く労働力を必要としていたからである。

その時の訪問でのルラ大統領の謝罪の言葉が印象的である。「16、17、18世紀に起きたことに対する責任は私にはない。しかし私は、黒人に対する仕打ちについて許しを請う」と、そして「アフリカに対する歴史の負の遺産を自覚している」と語った。ただ、ブラジルのコーヒーは18世紀から始まり、その前は砂糖だった。実際は19世紀までコーヒー農園での黒人奴隷は続いた。

セネガルの首都ダカールの沖合いに浮かぶ長さ900m巾300mの小さな島、船で陸から20分ほどのゴレ島は、アフリカの西海岸の近くにある。その島にある奴隷収容所にはアフリカから数多くの移民が連れられ、この狭い部屋に押し込まれた、とある。

そして「帰らざる扉」を通って船に積み込まれていった。この扉を通って売られた奴隷は、焼印をされ二度と生きて故郷に帰ることはなかった。この地から連れられたアフリカ黒人奴隷をブラジルの東海岸サルバドールでブラジル側の奴隷商人が待っていた。同じ人間なのに人間として扱われない人権という言葉があるが、黒人には人権はなかった。彼らは牛馬と同じとみなされていたからからである。牛馬には日本でも焼印で特定するが、黒人奴隷も焼印は牛馬ということである。人間が牛馬にされるその悲劇はどんなものか、想像することができない。

そのような悲劇が歴史のコーヒーの真実として存在した。そのような悲劇を作ったのは、植民地化しコーヒー栽培をさせ、利益を上げた北の消費する国側であった。そのような黒人奴隷、移民労働は「不公平、不公正」と簡単に言葉で片づけることはできない。そのような過去の歴史にフェアトレードが生まれる伏線がある。

■奴隷市場とブラジル古都サルバドール

1997年の私のブラジル訪問は、オーガニックコーヒーのためだったが、それは後になって思うことだが、フェアトレードを予感する旅だった。なぜなら、最初にブラジル友人に案内されるまま、行ったところは、サルバドールだった。サルバドールは南半球のブラジルの北の赤道近くに位置し、海岸が近く熱帯気候で、飛行機から降りた空港は道路を緑のアーチで囲いとてもエキゾティクだった。

サルバドールには、日本人は殆ど住んでいない。企業のプラント建設で単身赴任の友人には、仕事が終わってもお互い日本人や同僚のいないところだ。サンパウロに1年いて、サルバドールには2年住んでいるということであった。

サルバドールは1549年からポルトガル総督府があり、ブラジルの首都として栄えた古都である。
1558年アフリカから連れてこられた黒人奴隷が売買された南米大陸で初の奴隷市場が設けられた所だ。現在もここには黒人奴隷市場が残っている。
その案内された時は、何気なく黒人奴隷市場と思っただけだったが、それがコーヒーについて、そしてフェアトレードを学ぶにつれ、コーヒーの歴史にその労働は実に悲惨だ。アフリカから連れてこられる黒人奴隷は一人、二人など人数で言わず、何頭と表現され、人間扱いではなく、まさに牛馬であった。このサルバドールの浜辺でサッカーをして遊んでいる裸の少年たちは、真っ黒な黒人ばかりだった。
NHK80周年記念番組のハルとナツのコーヒー農園収録された東山農園にも行った。そこは三菱財閥岩崎弥太郎の五代目に当たる方が当主の、由緒あるコーヒー観光農園だった。この東山農園は、旧三菱財閥の創始者である岩崎家の三代目、岩崎久弥が海外事業の一環として1927年創設した。私が関心を持ったのは岩崎家の農園になる前の19世紀に建てられたコーヒー農園で働く人の家だった。建物は現在半分壊れかけていたが、そこには黒人奴隷が収容されていたという。
現在のコーヒー農園では黒人はあまり見かけない。というのもヨーロッパからの移民と黒人はブラジルに来て100年以上経過している。そのために、黒人とヨーロッパの国から来た人との混血やヨーロッパの国々の混血である。そんな人が多く働いている。日系人は日本人の伝統的文化なのか、移民が始まって100年だが、混血は少ないように思った。最後の移民から見ても30年と少ししか年代が経っていないということかもしれない。
それにしても、日本人として100周年に当たり思うことは、「移民会社にだまされた。死ね！」とブラジル第1回移民船笠戸丸で行った人たちから、その半分殺したいような罵詈雑言を浴びせられた。コーヒー農園に立ち当時を思うと、その心情も分かるような気がする。
ブラジル移民社会の中で、太平洋戦争後の「勝ち組、負け組」の悲惨な抗争があり、日本人同士が殺し合うような事件があった。ただ、これもブラジル移民という特殊な環境がそのようにさせたのだろう。

■コーヒーバブルの崩壊の悲劇

「コーヒーは金のなる木ではなかった。皇国植民会社に騙された」と、多くの人は言う。笠戸丸を仕立てた皇国植民会社の社長水野龍や監督責任者上塚周平は本当に騙すつもりだったのか。騙すつもりなど毛頭なく、国のため、移民者のためと新天地をブラジルのコーヒー農園に求めたのである。コーヒーそのものが、人々を狂わせる魔物のようなものである。
日本人ブラジル移民の計画は、1890年頃に始まった。その時のコーヒーはバブル高値で取引されていた。そのコーヒー高値の時、ブラジルで移民の計画がされた。移民の計画から実行の間に、コーヒー価格は大暴落した。1900年代にはブラジルコーヒーバブル経済の破たん後のコーヒー不況、危機という時代の大きな流れの中にあった。
サルバドールの黒人奴隷に始まる奴隷貿易を源流とし、数世紀たったコーヒー栽培、1800年終わりにコーヒーバブル、そして1900年笠戸丸移民の時のコーヒーバブル崩壊。そして最初のコーヒー労働契約の781人の日本人移民は、バブル崩壊の時であった。
戦前だけでも約19万人近くの移民者がいたが、その多くの人の移民とは何だったのか？どんな暮らしだったか？送り出した側の日本本土でも「ブラジル移民100周年」に、歴史の一つの事実がある。
歴史は繰り返すというが、笠戸丸移民以前コーヒーの木は本当に金のなる木と思われても不思議ではない現象があったようだ。日本の1990年は日本のバブル時代、土地の高騰、株高・金融のバブルと同じように濡れ手に粟みたいな話である。
そんなブラジルにヨーロッパから多くの移民労働者がブラジルに渡った。日本でも1990年代から、人手不足のバブル景気の時代の日本に仕事を求めてブラジル日系人がたくさん来た。移民で行った人と同じくらいのブラジル日系人20万人以上が、出稼ぎに来ているという。

山崎ちずか監督の映画「GAIJIN　１」について言ったが、前の映画は日本人の移民という出稼ぎだが、今度は反対にブラジル日系人子孫の日本への出稼ぎの映画が、同じ監督によって、「GAIJIN　２心の祖国」が2005年に完成した。

ここで、いかにコーヒーバブルで儲かっていたかの話だが、このようなバブルが100年以上前だが、ブラジルにもあった。それは、奴隷制が廃止になり、移民の計画が始まった。ブラジル奴隷制度廃止の翌年1889年は、コーヒー相場は1ポンド約13セント。日本の明治時代の1円は1ドルであるが、その時のコーヒだった。100年後、1989年日本の株や土地が日ごとに上がる。日本のバブル経済と重なるちょうど100年前のブラジルでのことである。

その頃を特徴している話がある。

「リオ・デ・ジャネイロの山嶽地帯でのファゼンディロ（農園所有者）は、1890年から1896年の6年間に、純益少なくとも1千コントを握った」ちなみに1万アローバは2500俵（1俵60ｋ）で、1コントが600円なので1千コントは60万円となる。当時のお金では大変な金額である。ブラジルでいう2500俵の収穫はそう大きくないファゼンデイロである。（註　1アローバは15ｋ）

日本人がヨーロッパなど海外や免税店でブランド品を買いあさったバブル経済の時代、土地転がし、株高など日本がバブルの好景気と100年前、ブラジルコーヒーはその同じような状況を呈していたようだ。

農園のバブル景気で、儲かったファゼンデイロは、お金持ちになりフランスのパリのホテルでファゼンデイロ同士顔を会わせたとこともあるという。海外旅行ができて、パリの高級品を買っていたのと同じことが期せずして、日本のバブル景気の100年前のブラジルにバブルのコーヒー景気があった。しかしブラジルではそれからコーヒー不況という時代が長く続いている。

■1997年コーヒ価格急騰

儲かったコーヒーもあったが、私がコーヒー農園に1997年に行った時は、まさにコーヒーバブル時代を思わせるコーヒー急騰の年だった。ブラジルコーヒー農園は、実に大きく、また広い。行けども、行けども高地で平原と農作物とコーヒー畑が続いた。サンパウロ州のモジアナ、カンピーナス、南ミナスから、ミナスジェライス州セラード地方まで、5，6ヶ所のコーヒー農園に行った。

その時、日本人移民のコーヒー農園経営者とも数人出会った。ほとんど日系人の2世、3世だった。顔も日本人、流暢な日本語を話すのだが、読み書きはローマ字で漢字は余り分からないようだ。しかし１世で移民できた人は読み書きができる人である。

私がお会いした移民でもコーヒー農園主は、決して楽な生活のようには見えなかった。また、農園で働く人はどんな生活、労働なのか、そこに思いを持った。日系人の農園の働いている作業場で働いている人は、土地の人で日本人ではなく、黒人との混血で完全に黒くはなく、こんなことを言うと、失礼だが服はみんなぼろぼろを着ていた。

ブラジル現地人を、移民農園2世の口から「土人（どじん）」と表現された。奴隷制度が廃止されてから100年以上経っているのにその言葉には驚かされたが、以前の奴隷制的名残が残っているのかと思った。

移民の農園生産者と話す機会が持てたが、コーヒー農園は経済的に大変だと言っていた。コーヒー価格が高騰してもそれは一時的で、自分の懐には入らない。出荷するときは安値だから、ずっとコーヒー農園は貧困だと言っていた。コーヒーでブラジル移民に成功者はいるのだろうか。

彼らが言うには、ただ一番の問題は、コーヒー生産者価格がいつも1俵60kg110ドルの原価割れという状態が続いている、と言うことである。また最近コーヒー危機が叫ばれ、多くのコーヒー生産者の生活の危機が続いているが、それはすなわち市場価格が原価割れというより、生産原価より、その市場価格が大幅に下回っているからである。

そのような原価割れコーヒー市場価格が長年続いていて、労働賃金も払えない、肥料代にも事欠くので、味にも影響するのだが、早くコーヒーの実を収穫し、お金に換えると言う。もっとお金が入るようにするにはどうしたらいいかという話だった。

100周年でもあり、日本でブラジルに行った人が紹介されるが、それは成功した1部の人でほとんどの日系人は大変な生活を強いられているのが現実である。ただ、日本の豊かさではない、その貧困だからと言って、彼らは不幸せではないように思える。
「仲買人や商社を通さずブラジルから、直接日本にコーヒーを売る」その打開のためのいろいろ話が出た。
1995年からNHKの衛星放送が始まり、日本のニュースや出来事も知っていて、日本では各地に新鮮な青空マーケット、とれたて野菜の販売、食品宅配の産直ができ、消費者と生産者を結ぶ販売方式が作られている。日系人ブラジルコーヒーにもそのようなネットワークができると、買い手が決まり安定した価格で販売でき、生産者が安心して生産できる。そんな話に興味を持っていた。
コーヒーにそのような販売システムができると、コーヒー生産者価格が安定するためにも、日系人のコーヒー農園と日本の消費者と連携ができたらと言っていた。日系人農園との産直コーヒーは、現実的にはシステムとして可能だが、日本側の消費者ネットワーク化できることが前提条件であるが、フェアトレードの原点を感じた。

■ヨーロッパでの苦いコーヒー

私は、ブラジルに渡ったコーヒー移民との出会い、そして1997年のブラジル訪問、そして、2002年のコーヒー農園訪問をするが、その年はコーヒーの大暴落した年だった。それからフェアトレードという歩みを始めるようになる。
現在欧州でフェアトレードが盛んだが、盛んになる理由は、ある意味では黒人奴隷を使って繁栄したヨーロッパの国々だったから、フェアトレードを先進的に進める必然性がある。その繁栄は、他にもスパイス、お茶、砂糖など多くの南の国の産物があるが、コーヒーというのはあまり見えにくいが、黒人奴隷の人たちの血と涙で作られたコーヒーがあったからであろうと思った。その国の消費国の人たちから、南の国の人たちの生産物を正しい価格で買うフェアトレード運動が起きているのは、当然である。
南の生産国に対し、北に位置する消費国としてのヨーロッパでは、18世紀から、19世紀とコーヒーの需要はヨーロッパに広がり、各地にコーヒーハウスができ、そこは当時の社交の場で、出会い、情報交換、また世情を語り合うなど多目的な用途で発展した。
ロンドンではそのコーヒーハウスは当時において1683年3000店、1714年8000店を数え爆発的なコーヒー・文化の隆盛であったとある。そこはまさに商業人、知識人など、ビジネスオフィスが無かったとき、コーヒーハウスでは彼らが、ビジネスオフィスの場としての商談、イギリスの商業、産業発展にとって切り離せない役割を持ったほどである。
フランス革命が叫ばれ、パリで知識人、画家などコーヒーハウスを使って、政治、社会、歴史、その圧制など語り合ったが、そのコーヒーは、まさにアフリカからの奴隷労働や、その手によって栽培されていていた、ということを語っていたであろうか。
多くの人の労働や手を煩わし、種苗の植付けから成木となり、赤い実をつけるコーヒー収穫まで５年ほどかかる。この間は、コーヒー農園主や経営者にもお金は入らない。いかに奴隷労働と言えども、大変な投資である。そこでコーヒー生産は国家か財閥、大資本家によるコーヒー開拓、生産大規模プロジェクトでしかできないものであったろう。そこに、アフリカから黒人奴隷はそのための労働力として供給された。コーヒーはその当時から、まさにニグロの汗、ニグロの血と汗のコーヒーであった。
何かの時に奴隷のようだとか、普通の会話で使われるが、コーヒー農園の奴隷や移民の労働は簡単な言葉で説明できない壮絶なことだった。

奴隷というのは簡単に言うと、牛馬などの家畜と同じ扱いだったということである。牛馬は一つの作業しかできないが、黒人奴隷は人間だから、コーヒー園の除草、植付け、手入れ、コーヒー収穫、乾燥、運搬、コーヒー輸出の船積みなど、など何でもできる。コーヒー園では、本来まさ

に重宝していた。しかしコーヒー園では朝の四時から夕方七時まで働き、鉄砲を持った監視がついて、逃亡した罰として首の鎖や足の鎖、すべての自由を奪われたのが奴隷である。
人間としては扱われなかった。アフリカから輸送するのに何人とは言わず、牛、馬と同じように何頭として扱われていた。しかも牛馬の競のように売買されたのだ。輸送途中で亡くなる奴隷も沢山いたという。奴隷解放が叫ばれたのは当然である。現在でもコーヒーの生産者側は、労働賃金1ドルにもならないような人がたくさんいることも忘れてはならない。

II. フェアートレードとは？

フェアトレードという言葉が日本でも聞こえるようになったのは、2002年になってからである。もちろんその前にも、幾つかの団体ができたが、世界の貧困な人々を助ける運動をしているオックスファムインターナショナルが、途上国のコーヒー生産国の現状を調査して、コーヒー危機（Poverty in yourcoffee cup）のレポートを発表してから、コーヒー生産者の暮らしの惨状が知られるようになった。
フェアトレードの視点でコーヒーに限って言うと、対照的なキーワードが3つあると思う。
１つは、北の消費者と南の生産者
２つは、北の儲ける人と南の貧困な人
３つは、北の搾取してきた国と南の植民地化されてきた国
私自身コーヒー生産者のことは、ブラジルでいくらか知っていたが、その生産の貧困の実態と反対側のコーヒー消費を取り扱う大儲けしている世界の多国籍企業側についての実態を、このレポートで知った。
コーヒーというものが、世界でどのように売買されているか、流通しているか、生産者から消費者までのプロセスについて、あまりにも不透明である。不透明であるというより、日本の一消費者には調べように調べる方法がない。その流通を全部追って明らかにする作業自体大変なことである。私はこの作業を実践から得たいと思った。

■フェアトレードの広がり

南の国には生産物は豊富にあり、北の国は香辛料やその他南の国の産物を求めて植民地化したが、現在は、特にヨーロッパでフェアトレード商品として、南の国で生産される綿、紅茶、カカオ、スパイス、伝統的手作り民芸品などある。
フェアトレードは、ヨーロッパには幾つかの団体があるが、フェアトレードの認証ラベル発行する団体や代表的なIFAT(International Federation for Alternative trade)は、1989年5月アフリカ、アジア、オーストラリア、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカの団体によって、設立された団体だが、主にその団体のフェアトレードの概念が日本に紹介される。
フォーラムの開催、情報交換、フェアトレードを促進する北の組織として、南の生産者の橋渡し役を持っている。47カ国143団体加盟、2005年現在は60カ国270団体に着実に増加しているという。生産者の持続的な生活の向上と地域の発展を目指し、IFATがフェアトレードの考え方を一つの基準として、提案しているのは、
1　生産者に仕事の機会を提供する。
2　事業の透明性
3　生産者の資質の向上
4　フェアトレードを推進する
5　生産者に公正な対価を支払う
6　性別に関わりなく平等な機会を提供する
7　安全で健康的な労働条件を守る

8　子どもの権利を守る
9　環境に配慮する
以上の9項目がその基準としている。
ただ、これはヨーロッパで始まったものだが、歴史や社会の事情による考え方の違い、商品流通の仕組み、消費者意識など日本と違うところが多い。その点を踏まえて日本でのフェアトレードの構築が必要とされる。南の国の生産物はいろいろあるが、コーヒーをフェアトレードで考える。そのことで、フェアトレードの理解が進むのではないだろうか。

■コーヒー危機

私がブラジルに行くと、コーヒー価格の暴騰と暴落に縁があるようだ。1997年5月にブラジル行ったときは、毎日相場が変わりコーヒー価格が急上昇していた。その月は最高値をつけ、（表1）173セント（ポンド）だった。2002年の6月に行った時は、（表１）27,4セント（ポンド）なので、これが同じコーヒーと思えないぐらい、信じられないほどの価格の大変動である。
10年に一度のような大暴騰の月と最低の月に、たまたま世界最大のブラジルのコーヒー農園に行ったということは、フェアトレードを何か運命的な糸と結びつけ自らを重ねて一人思うこともある。
この大暴騰の時、5つほど日系人も含めてコーヒー農園主にあったが、この大暴騰価格に喜んでいるかと思ったが、彼らは「10年か20年に一度はこんなことはあるよ」と冷めたものの言い方だった。そして、いつもこんな価格ならいいけれど、またすぐ下がるんだ」と言った。
収穫が始まり、豆を出し始める頃になると、確かに彼が言うように豆の価格は下がり始めた。豆の価格が上がるまで備蓄して待って売りさばく、という農家の生きる知恵はあるが、そこまで備蓄するのは容易ではないらしい。コーヒー農家はコーヒー相場が高くなっても、その時売り抜くような力はない。
毎日の生活に追われているので、豆は安い価格でも手放さざるを得ないのが現状で、従って価格高騰の恩恵に預かる機会は少ない。
フェアトレードを決意するには、自分なりの伏線があった。私は1997年にブラジルのコーヒー農園を訪問してから私のコーヒーに対する考えがかわった。その時コーヒー農園主や働く人たちの暮らしの貧困さを感じた。「1935年に移民でブラジルに来た」という老夫婦は、苦労に苦労を重ね、細々とコーヒー農園を持ちコーヒーで生活している人だった。ある日系人移民に「日本に里帰りしたことはありますか」というマスコミの取材を見たことがあるが、とてもそんなことを尋ねることはできない状況だった。里帰りできる人はごくわずかである。
フェアトレードへの取り組みを決めたのは、2002年のブラジル訪問のコーヒー危機から、そして日本に戻り、日本フェアトレード委員会の立ち上げを始めた。
早速「2003年国際フェアトレードフェスタin九州」の第1回開催、翌年2004年には第2回目を開催など、いま思うと、その一念から2005年8月に「国際フェアトレードinコロンボ」をスリランカで開催するところまで、短い時間駆け足でやってしまった。
そして2007年からスリランカのコーヒーを復活することを目的に、JICA草の根支援事業の委託を受けて現在活動中である。

■アンフェアなコーヒー取引

フェアトレードという言葉は、日本に広がり久しくなるが、多くの人たちの中に、認知され、少しずつ人々の心をとらえるものになってきている。その理由は世界に戦争、貧困、飢餓、テロ、差別、暴力など人類に反する非人道的、アンフェアなことが多く発生している。それに対しフェアトレードという言葉自体、正義で、公正でとても魅力的である。
私自身フェアトレードという言葉に出合い、それを意識したのはコーヒー生産者価格の歴史で、2002年のコーヒー価格大暴落のブラジルの丁度、たまたまコーヒー農園訪問からである。繰り返

しだが1997年はコーヒー価格の最も暴騰の時、暴騰価格そして暴落価格の2度のブラジル農園訪問が、日本でのフェアトレード組織を立ち上げるきっかけであった。
フェアトレードというときれいな言葉だが、それではそれは何か？というと概念上の整理もあろうが、実際上のその流通も含め、フェアトレードの中身が見えるようにしなければならない。世界の南に位置する途上国で生産されるコーヒーがあって、そのコーヒー価格によって、苦しむ人たちがいる。
生活ができる価格で売れない。目に見えないが、どこかにいる力のある人にコーヒー価格が支配されている。現地の仲買人に不当に買いたたかれるアンフェアなコーヒー売買状況がある。コーヒー買い取りを業にしている仲買人自らも、実は目に見えない力で安く買いたたかなければならないようにされている。現地はコーヒー生産者、仲買人の生活もすべて、途上国のコーヒーに関係している人たちの貧困の実体がある。
本著では不十分だが、現在の課題はそのフェアトレードの考え方や、概念そして方向性も示さなければならない。
このフェアトレードを言う際、問題にしなければならないことは、その反対語であるアンフェアとは何か？
コーヒー生産者から仲買人を通じ最終的には、世界の焙煎業者のメジャー企業が農家の生活ができない価格で、コーヒーを安く買う。弱い立場のコーヒー農家は、あまりの貧困なために、どんな安い価格でも売らなければやっていけないのが小さい農家、そしてそこで働くコーヒー労働者である。彼らは団結して価格交渉すらできない、また彼らは消費国の情報不足や知識不足でコーヒーを高く売る方法さえ知らない。
反対にコーヒーを買う人はいかに安く買うかのスタッフと方法を常時研究している人がいる。このように弱い善意の生産者、そして何も知らない、高く売る術を知らない人たちから、たたいて買う強者はまさに価格交渉においてもアンフェアである。メジャー企業の中には、最近は自らフェアトレードコーヒーとしてブランド化したコーヒー販売をしているが、これはメジャー企業もついにフェアトレードコーヒーを始めたと世間では好意的に言われるが、別な見方ではこれこそ欺瞞的かもしれない。
なぜなら、メジャー企業は消費者へフェアトレードという良いことをしていますという顔を作りながら、世界のほとんどのコーヒーが、メジャー企業に先に言ったアンフェアな形で買われているからである。実はメジャー企業のほとんどのコーヒーはフェアトレードでないのである。もしフェアトレードならば、世界のコーヒー農家全体の生活が数倍よくなるのである。

■日本フェアトレード委員会

コーヒー大儲けをしているメジャー企業は、本来貧困な生産農家労働者に儲けを返さなければならない。このアンフェアな価格では、弱い立場の農家は暮らしていけない。コーヒー農家アンフェアがあることを言わずして、フェアトレードはないはずである。
しかしフェアトレードコーヒーをメジャー企業が、ブランドとして発売しているのは、フェアトレードの運動の結果、世間から儲け主義と批判され追い込まれたからでもあるが、消費者にいい顔して、その実はちゃっかり儲けのみを追及するための、フェアトレードコーヒーを利用している。
本来フェアトレードは概念、理念であり、それは貿易の仕組みであり、生産者と消費者との関係であり、その企業の経済活動のシステムとその方法、そのあり方、全体の仕組みなのである。
従って、アンフェアな儲け一辺倒の買いたたきを持ち止めるべきだろう。自分だけフェアトレードで価格で生産者から買ったとしたら、他のコーヒー企業に市場で負けてしまうからできない、というかもしれない。
そのためにも世界のコーヒー市場は、超独占企業に支配され、貧困を余儀なくされている途上国のコーヒー生産農家の実態を踏まえ、フェアなコーヒー価格のためにコーヒー国際協定を作る

ことが求められている。

私は日本での活動のため、微力だが2002年日本フェアトレード委員会を立ち上げ、日本独自のフェアトレードの歩みを模索し、日本フェアトレード委員会をNPO法人の認証を2004年6月取得し、現在自らのフェアトレード活動の確立を追及している。

フェアトレードは、どこから何をどのようにして輸入した品物なのか、生産者はどこにいるのか？フェアトレードとは何か？フェアトレードの概念、考え方や基準はあいまいに日本でフェアトレードが語られている。南の国の品物がすべてフェアトレードと言われ、まがい物も混じる危険性がある。

フェアトレードは、公正な貿易のパートナーシップ、透明性の高い取引、南の弱い立場にある生産者や働く人たちの権利を守る。そして対話と国際貿易を通して、様々な国際交流を行うものである。中でも商品はあくまでも輸入、輸出側の金銭や経済がからむビジネスでもある。そこで弱い立場の生産者から安く買って、消費者に高く売り、フェアトレードという悪用するようなビジネストレードは、フェアトレードとは言えない。



2003年5月の催しのチラシ

■コーヒー飲用

消費国のコーヒーは、店にならんだきれいなパッケージ、インスタントコーヒーや缶コーヒーのコマーシャルのコーヒーがすべてと思う人もいる。世界のいくつかの超多国籍企業によって、コーヒー会社は系列化され世界のコーヒーを支配している。ネスレのコーヒーは消費国でのみ宣伝されているかと思っていたが、さすがに超多国籍企業とでも言えるのか、最近スリランカの途上国の空港などでもネスレの立ち飲みコーヒーを見かける。

世界で生産されるコーヒーはその超多国籍企業で買い占められ、相場を動かすメカニズムである。そのことで100年以上前から、コーヒーによって金満家になる人、そうではなく貧困に喘ぐ生産農家や労働者がいる。コーヒー生産農家では、搾取より、もっとひどいことがずっと続いてきたコーヒーの労働者の歴史である。

現在コーヒー生産者や労働者の貧困は、世界的に問題になり、そのような状況からコーヒーをより正当な価格で買う運動として、フェアトレードが始まっているのである。「世界の2500万人のコーヒー生産者や労働者を飢え飢餓から救おう」というキャンペーンが行われた。

ここでちょっとコーヒーについて考えてみよう。なぜコーヒーがあるのか、と考える人は少ないが、世界には、様々なアルコール飲料の酒があり、それは人間をというよりか、私などとても快活にしてくれる作用があり、気持ちを良くし、ときに「酩酊」団欒に誘う。それに対しカフェインの入った飲用がお茶とコーヒーである。カフェインの入ったものは、アルコールの酩酊させる反対側に位置し、「覚醒」の役割である。その覚醒の役割を持つのがお茶と違い、もう一つの飲物がコーヒーである。ちょっと疲れたとき、ホッと一息するとき、食事の後の団欒などに飲んでいる。エチオピアでは人の接待儀式としてもある。

世界ではその覚醒の飲物として、お茶かコーヒーの世界の2大飲み物のいずれかを世界の人々は飲んでいる。そのような特徴を持つコーヒーである。日本では、もともとお茶だけだったが、現在はコーヒー飲用文化も持っている。

コーヒーというものは、不思議な飲み物で、焙煎（ロースト）という火を通すことで、一般の人は知らないが、固い生豆から不思議な味がうまれる。その不思議な味を生み出すためには、必ずくぐらなければならない、そして必要となる作業が焙煎である。その焙煎という作業を、誰が見つけたのだろう。伝説にはコーヒーの畑が山火事にあってからということもあるが、実際赤いコー

ヒーチェリーの実から現在の飲料になるには、かなりの時間がかかっただろう。生の豆は全く味のないというか、いやみの方が強いが、その生豆に火を通す「火の洗礼」をすることで、コーヒーは「たくみに味」を変化させる。

コーヒー飲用の文化は世界に広がり、コーヒーを飲むフィルターによる「ろ過」「砂糖とミルク」を入れる飲み方など広がった。さらに洗練されたコーヒーカップ、コーヒーハウスの中のきらびやかなヨーロッパ文化に溶け込み、コーヒーは貴族など特別階級の飲み物だった。そして一般人にも普及したのは、1600年代の後半から、そして現代に至っているのである。

■世界にコーヒー生産は広がった

コーヒー飲用が多くなると、世界にコーヒー生産が広がる。
そのヨーロッパに入る前には、イスラムの世界では1500年にはモスクなど僧侶を中心に飲んでいた。一晩中お祈りするときの「覚醒」の役目と「黒い神秘的」な飲みものだが、それはお参りする教会の精神的なもの、心理的なものがあったのか。いずれにしてももともとコーヒーが飲用されたのは、アラビアであることは間違いないし、イスラムの世界であった。

しかし急激なヨーロッパ世界のコーヒー飲用の広がりに、生産を追いつくことが世界各地に生産地を広げる要因だった。そして飲用に追いつくために、コーヒー生産地は広げられた。現在は全世界のコーヒー生産は、約1億袋（1袋60kg）だがブラジルが世界の生産量の3割、4割を生産し断然トップである。最初17，8世紀はイエーメンのモカコーヒー、そして19世紀には、ジャワコーヒー生産がモカコーヒーを抜き世界で一番だった。

その後、コーヒーの世界の需要と共にますます増え続け、さらに栽培も現在コーヒーの世界最大の産地中南米に広がった。中でもポルトガルの殖民地であったブラジルは、広大な面積と気候その他肥沃な土地など自然条件はコーヒー栽培に最適であった。
ブラジルで1727年からブラジルコーヒー移植が始まったが、ポルトガルの支配下からブラジル独立後本格的に始まり、広大な土地の肥沃な農園は開拓され続けた。すればするほどコーヒー農地は殖やことができ、栽培を繰り返し、1850年にはブラジルコーヒーは世界のコーヒー生産の半分を占めるまでになった。

ブラジルコーヒー輸出は1870年代初期には、250万俵台だったのが、増え続け1880年終わりには550俵台の倍になった。それ以降もブラジルコーヒー生産は増え続けた。

世界の生産はそのとき、1870年730万俵というから、ブラジルのコーヒー生産は群を抜いていた。そして1900年には1500万俵にまで伸び、1900年代になってからのデータでは、ちなみにブラジルに限ったコーヒー生産量は、どんどん伸びた。

そのような世界のコーヒー生産、世界の植民地支配の列強の富をつくる換金商品のために、世界のコーヒー生産の増大は競って、コーヒー生産を続けた。17、18、19世紀と続く安い奴隷労働を使ったコーヒーの儲けはいかばかりだったろうか、スリランカのコーヒーの本にも19世紀半ば、コーヒーは儲かったとある。しかし儲かるコーヒーを、各国で作り始めたことと、特にブラジルのコーヒー生産だけで世界の消費量を上回り、需給のバランスが崩れコーヒーの価格の大暴落を招く原因ともなった。

日本でコーヒーの呼び名というと、モカコーヒーといい、またジャワコーヒーという。それは味もさることながら、世界最大の生産のコーヒーを誇る国の威信から出てくる呼び名でもある。そして20世紀になりブラジルコーヒーと言う人が多いのは、ブラジルが全世界のコーヒー生産の供給、価格などすべてにおいて世界のコーヒー覇権を獲得したことと言えるであろう。

しかし現在の世界のコーヒー市場は、3000万俵を超える世界最大生産のブラジルコーヒーと各国換金作物コーヒーは、生産過剰が続き、100年来慢性的コーヒーの低価格化になってきたという事実もある。そのしわ寄せは、コーヒー園で働く労働者と小農民に覆いかぶさった。

■北の消費者には、おいしい飲みものだが…。一方の南の生産国は…。

コーヒー業界の４つの巨人企業クラフト、ネスレ、P＆G、サラリー社の4社で世界の巨大なコーヒー市場の4割を握る。そのような巨大企業がコーヒー農園と生産者、労働者の生殺与奪権を持っているようだ。

消費国で、「あなたのコーヒー1杯が世界の貧困を救う」このキャッチフレーズが多くの消費者の心に入ると、フェアトレード運動が進み、実際にコーヒー価格の安値で苦しんでいる生産者や労働者は、フェアトレードは救いの神となる。

コーヒー生産者は、安心して暮らし、地域コミュニティができ、地域福祉や、もちろん教育施設、病院などが建設され住民生活の向上となるだろう。

消費国ではコーヒーはおいしい飲み物だが、コーヒー生産者側は少しもおいしくない。「作っても　作っても貧乏なのが、生産国、生産者側のコーヒー」である。

私は、ナチュラルコーヒーという小さい会社を設立し、南ミナスジェライス州のブラジル生産者から、オーガニックコーヒー生豆を直接サントスの港から船で、日本に輸入している。輸入数量はわずかだが、それでも最低小さいコンテナ1本、コーヒー生豆１袋60ｋｇが250袋15トンである。15ｔでちなみに200ｇ入り袋で6万個、コーヒー1杯10ｇとすると120万杯である。

世界の最大手のクラフト社は、年間80万トンだが、それは大変な量である。その量は日本人1億2千万人のコーヒー飲用の倍を1社で貿易している。ちなみに日本のコーヒー利用は世界第3位である。日本のコーヒー輸入量は2004年43、6万トンだから、日本の全輸入量の倍ほどが超多国籍企業1社の貿易とは驚きである。それは世界の14%ほどで、それだけ巨大である。

この巨大コーヒー企業は、世界のコーヒーの相場を動かすことができる。需要より生産供給が多くなると、価格は下がり、その逆だと、一時的にもコーヒーが上がる。そうなると、世界の生産者はコーヒーを一斉に作り始めコーヒーが増える。

そのため、コーヒー生産供給が多くなり、在庫が多くなって価格は下がる。その繰り返しだが、それを上手に繰られているのがコーヒー生産者である。べらぼうな儲けのコーヒー大企業と最も貧困なコーヒー生産者、そして飢餓に瀕するコーヒー労働者がそこにはある。

そのような超大手企業は、ブレンド豆のとき、またコーヒー豆を買うのに、一番安い国の豆をコンピュータのマウスをクリックして決める。それに対比する意味でもフェアトレードは貴重なことで、コーヒー生産者を特定することができ、生産者と納得を条件にコーヒーを買う。つまり「コーヒー生産者が生活できる」ということである。

超多国籍企業は一つの生産農園者の労働者が暮らせる価格など思いを寄せることはない。そんなヒューマニズムな思いは持とうとしない。仮にしようとしても、そんなことは自分自身があまりにも怪物みたいに巨大すぎて、小さいコーヒー農園を考えることなど不可能なことである。しかし現実の世界のコーヒー農園やその働く人は、その殆どが小さい農園、零細な貧困な農園と生産者ばかりで、一日の収入が1ドルにも満たない人が圧倒的だ。

消費者はコーヒー生産者を感じること、生産者がみえることが、地球の反対側や山岳部で働くコーヒー農民を理解することが、フェアトレードにつながる。コーヒー生産現場に近い所と直接売買する時、初めて自分たちの飲むコーヒーがフェアトレードを感じる。

超多国籍企業は生産者を感じることができない。数字のマジックで、コーヒー農民から収奪し経済的繁栄を独り占めにしていることを見ることも大切だ。

フェアトレードは生産者の顔が見えるということをコンセプトにしている。ナチュラルコーヒーは農園から、生豆を購入している。生産者の顔の見えるということで、ブラジル語「カーラ　カーラ」というブランドである。「顔と顔」、つまり「生産者の顔が見える」という意味である。

フェアトレードは生産地を求め、どんな生産地なのかを訪ねる。特に農薬問題、栽培方法、堆肥について、どんな生産方式か、特に生産者の考えを聞く。すると、おもしろいことに、生産者の共通点がある。農産物の生産者はコーヒーでも野菜でも皆同じ、それは自然環境を守る、ということである。有機に切り替えるときには、みんな大変だったこと、それでもそれを喜びにして

いる生産者共通の魂がある。
ブラジルのコーヒー農園には、超多国籍の社員はコーヒー農園など見に来た人はいない、コーヒー価格をニューヨークでいじっているばかりだと、あるブラジルコーヒー農園主は言っていた。

■フェアトレードはコーヒー生産者を守るとりで

フェアトレードと言われるものには、いろんな商品があるが、この本でなぜコーヒーを取り上げるか。それは、コーヒーは世界の換金される貿易農産物として大きい位置を占め、コーヒー生産者、労働者その家族の生活、地域経済に大きく影響するからである。
世界の南の国の途上国の換金する品物には、様々あるが、オイルに次ぐとも言われ、南の国の農作物としての貿易品として最も大きな位置を占めているのがコーヒーである。
コーヒーは1700年、1800年と華やかなヨーロッパ上流社会の社交の飲み物として栄え、そして一般の人にも飲料が広がり、コーヒー商人は大儲けをする陰に、「ニグロの血と汗」と言われ、そこで働くアフリカから連れて来られた黒人奴隷、それから移民労働者がいた。
「ちょっとひと息、現代社会のストレス解放手段としてのコーヒー」コマーシャルで聞こえてきそうなフレーズ、「リラックス効果がある飲み物」そして「少しおしゃれ」だったり、「贅沢な時を過ごすコーヒー」は、消費国のコーヒーである。
一方南の国のコーヒー生産者は、運命でも皮肉でもなく、あまりに悲惨なことは、経済的な悲惨さばかりでない。おいしいコーヒーを飲まない。自分たちが作ったコーヒーさえ飲んだことがない。コーヒーの飲み方さえ知らない。コーヒーを作る労動しか知らない、1日1ドルにも満たない労賃で働くコーヒー労働者がいるのが、コーヒー生産者の世界である。
もちろんコーヒー飲用文化さえ知らない。以上のようなコーヒー生産者の実態がある。世界の飲み物のコーヒーとして、まさにフェアトレードで語るとき、よみがえるコーヒーの実像はどちらなのか、消費国か生産国か、そのどちらも現実のコーヒーの世界の実像である。「貧困な生活か贅沢な時か」消費国と生産国の実像である。消費国ではきれいで人々を楽しませるコーヒー、反対に生産国では、貧困を作り出すコーヒー、汚れた作業着で働く人たち。その両方ともコーヒーは実像である。
コーヒー生産者価格は、100年来慢性的に最低価格保証のないコーヒー価格の自由市場にゆだねられている。コーヒー生産者は、大変な貧困に突き落とされる世界の大きな需給コーヒーシステムにはまっている。
南の国の人たちの商品から見ると、その他のカカオ、バナナ、紅茶など生産物など多くの農産品があるが、「コーヒーとは？」･･･世界中で取引される重要な一次産品で、世界の南の国の人たちのコーヒー生産者は貧困にさらされ、石油に次ぐお金になる商品であるにもかかわらず、世界のコーヒー農園従事者と、その家族は救われていない。

■コーヒー価格の変動は、途上国の国家財政をゆるがす！

コーヒー価格の変動は、生産者個人だけでなく、驚くことに国家の財政にも深刻な影響を与えている。輸出産業の最近だが、トヨタなど自動車の大幅な販売減少が続いているが、それが国家財政輸出の大幅減少ではない。まさにコーヒー危機は、国家財政の大幅減少である。
アフリカの幾つかの国では、コーヒー生産者だけでなく、コーヒーに依存する度合いの大きい国家においては、国家財政に影響を与え、生きるか死ぬか国の経済に大きく影響する。
先に言ったように、コーヒーは世界の第1次産品として貿易の代表である。産地の熱帯、亜熱帯の産地では、その経済をコーヒー貿易に大きく依存している国が多い。1989年にコーヒー協定が事実上なくなり、コーヒー価格は大暴落と低迷を続け、生産国からの悲鳴として2002年コーヒー危機が叫ばれた。コーヒー危機とは、その依存度の高い国では、生産地の国の経済への打撃ははかりしれないことから、コーヒー危機と言われるゆえんである。日本フェアトレード委員会はコー

ヒー危機（写真１）の本を出版した。
　コーヒー生産地は、世界に60数カ国あり、その南の国の殆どでコーヒーが生産されているが、もともと途上国の貧困な中南米の国とアフリカ、アジアにそれらの生産国はある。その中でもコーヒーを主要な国家輸出の生産品としている国においては、その国の経済に与える影響は計り知れない。
　エチオピアはコーヒーの発祥地、原産地として有名で、エチオピア高原のカーファ地域がコーヒーという言葉として、なまって現在のコーヒーの言葉になったという「語源」という一説もあるほどのコーヒー生産地エチオピアは有名な産地である。
　そのエチオピアでも深刻なコーヒー危機がある。エチオピアでもコーヒーが国の財政を支える外貨獲得の輸出品となっている。またコーヒーに「依存する割合が高い国々がアフリカを中心に中南米に多くある。国によっては、一番多いのが、（表2）コーヒーに国家経済依存度80%のブルンジのような国おいては、さらに深刻。ブルンジはアフリカ中央東部に位置し、2,78万ｋ㎡九州より一回り小さい国。人口710万人、産業は殆どがコーヒーである。2004年コーヒー生産量は2万ｔ。外貨獲得手段として輸出は、コーヒー80%　茶19%となっている。
　このような国では世界のコーヒー生産者価格が、国家収入に直接結びついている国家経済は成立するのだろうか。
　下記の（表2）は、コーヒー輸出が国家収入に依存している割合を示している。
コーヒー価格の大暴落と低迷は、コーヒー貿易での外貨獲得としている国には、その国の財政に直接影響を及ぼし、国家財政危機そのものに直接影響を及ぼす。

コーヒー輸出に依存する国家輸出割合（2000年）

ブルンジ（アフリカ）	80%
エチオピア（アフリカ）	54%
ウガンダ（アフリカ）	43%
ルワンダ（アフリカ）	31%
ホンジュラス（中米）	24%

（表2）

　エチオピアではコーヒー大暴落により、国家財政に甚大な影響を及ぼした。エチオピアは54%もコーヒー輸出に頼っている。エチオピア国土は日本の3倍、人口7,000万人エチオピアは国家収入のかなりの部分を、コーヒー収入に頼っていることが分かる。人口の4分の1がコーヒー産業に従事している。コーヒー生産量は450万俵　世界の8番目。
　そのコーヒーの国家収入が、国家にどのように影響しているかの例をみよう。
　2000年2億5700万ドル
　2001年1億4900万ドル
　コーヒー価格の大暴落により、財政収入が1年間で42%も落ちた。

■コーヒー生産者は慢性的貧困農家の叫び―どのように暮らせばいいかー

　コーヒー価格の高騰と大暴落は、ブラジルの30年間(1975年～2004年)に高騰したのは4回ある。
　1977年1ポンド196,87セント、1986年1ポンド190,75セント、1994年1ポンド165,95セント、1997年1ポンド173,06セントを記録している。反対に一番の暴落価格は、この30年間で2002年の1ポンド24,78セントである。
　その最高価格との価格差は実に約8倍である。高騰の原因の数値は霜や旱魃の自然災害で収穫が大幅に下がったことなどによるが、価格は上がっても収量が少なく、コーヒー生産者の手取りの収入に変化はない。
　フェアトレードが起こる背景は、このように高値があっても、翌年には大暴落を繰り返し、慢

性的貧困で、低価格で苦しんでいるコーヒー農家の存在に起因する。
国際相場コーヒー価格は、コーヒー重量1ポンド（454g）当たりに対する金額のドル単位のセントで表される。コンテナに積み込む1袋単位は60kgが標準である。1989年ICO（国際コーヒー機関）の輸出割当制度停止、アメリカ脱退から、安定価格の破壊を招いているが、それまでは、コーヒー生産国との関係で、コーヒー価格の目安があった。
それがICO（国際コーヒー協議会）のコーヒーの安定価格帯とされ、おおよそ158～185セント（1袋60kg）とされていた。これを国際相場の表示価格で見ると、1ポンド　1.2～1.4セントとなる。これが生産者のほぼ安定価格帯とされているが、この安定価格帯が全くなくなったのが、特にこの10年以上前からコーヒー生産者価格の安値に歯止めがなくなり、コーヒー不況に見まわれている。
コーヒー史上もっとも安い価格になり、ブラジルでも2002年8月の最安値は、24.78セント、1袋（60kg）約3,275円となる。この安定価格も高くはないが、その安定価格帯の20%以下の価格であるのは悲惨だ。
もっと安い1ポンド（454g）当たりの国際相場の悲惨なコーヒー価格は2002年に起こった。
ブラジル　　24,78セント　　エチオピア　22,41セント　この国だけが安いのではなく、全世界を襲った生産者価格に、生産者は泣いていた。この価格は、１kg に換算しても、ドルの為替相場でいくらか違うが、１kg 当り約50～60円である。
日本のコーヒー市場は、消費者にはコーヒーは安くならないが、生豆を売買する業者は安い価格に驚きながらも、喜んで儲けを増やした。コーヒーのすべての豆は、日本のコーヒー市場でも最安値で取引され、生産者が泣いていることを知らないというのが消費国のコーヒー業界である。多国籍企業の儲けのおこぼれ頂戴をしているということである。生産者にとって、100年来の悲惨な価格であるが、・・・・。
キリマンジャロで有名なタンザニアでは、2003年3月に1ポンド21,87セントにまで下がっている。生きるためのコーヒーの生産者価格がこんな価格になっては、コーヒー生産者やそこで働く労働者はどうして生活ができるのか。このような安い生産価格でどのようにコーヒー農民は暮らしていけば良いかという、悲痛な訴えが聞こえてくる。
ところで、一般的に言われるフェアトレード価格では、最低1,26セント　1袋（60kg）167セントとなっている。安定価格が崩壊した今、このコーヒー生産者の危機を救うのは、だろう。フェアトレードはどんな市況でも、安定した生産者の生活ができる価格でコーヒーを買うからである。
現在のこのようなコーヒー生産者危機の原因は、過剰生産が続き、4000万袋在庫があり、需要を供給が大きく上回り、需給のバランスが崩れてしまったことにもよるが、このような市況で一番損をするのは、コーヒー農民である。そんな市況とは無関係なのがフェアトレードである。
ただ過剰生産は、ベトナムのコーヒー生産の大幅な伸びと、1990年の150万袋が10年後の2000年は、1500万袋。またその巨大産地ブラジルでは、4000万袋を超えるようになった。それは、栽培方法と三角ミナスセラード地方に産地の開発、移動、機械化と集約農業のため、生産量は飛躍的に伸びたことでもある。
そのような機械化されたブラジルコーヒーの生産地と比べて、同じ以前からの生産方法を取るブラジルコーヒー生産地では「1000人以上の人が1日働いて275袋コンテナ1台分だが、ブラジルセラード地方では、5人の人間と1台の機械があれば、2,3日で同じコンテナを一杯にできる。」どうやって競争できるのか、と労働集約型のコーヒー生産地から悲鳴に似た声が上がっている。

■フェアトレードだったら生産国は救われる

生産者価格は下がっているのに、消費者末端価格は、ほぼ変わらない。それなら中間にある差額の儲けはどこに行ったのか、誰でも疑問に思うところであるが、答えは簡単。「世界の生産者の取り分がなくなった」ということである。
この価格の暴落によって世界のコーヒー生産者の取得できる収入が消えたのである。逆にこの暴落分の差額の儲けは、空に消えてなくなったのではなく、コーヒーを購入した側、焙煎業者やコー

ヒー流通の中間の人たちに、移転したのである。

世界のコーヒーが、ちなみにフェアトレード価格だったら、どれだけ生産者にお金が回ったかを単純に計算してみる。どれだけ利益が移転したか計算することができる。おおよその概算で、111,7億ドルである。その金額が生産者に入らなかったのである。

フェアトレード生産者価格167ドル（＊註１）とする。（1ポンド126セント1袋60kg）（註1：ヨーロッパの2002年のフェアトレード価格）2009年現在は、国や経済事情などで大きく違うが、こらからの研究課題である。私の現在の考えは生産性の低い小農民ほど高くし、1袋60kg200ドル以上は必要と思う。

2002年平均価格　40.8ドル（1ポンド30.9セント1袋60kg）
ブラジル2002年平均ICOで計算する

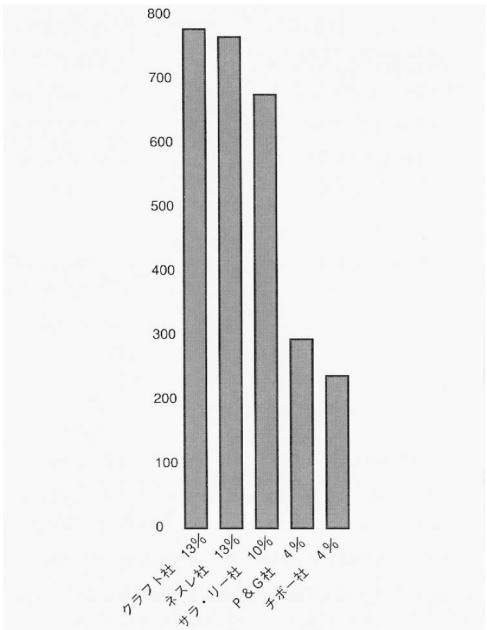
①フェアトレード価格	167ドル　１袋（60kg）
②世界の総輸出量	88,477,206袋（１袋 60kg）
③　①×②＝	14,775,693,235ドル　約147.8億ドル

①大暴落価格	40.8ドル　１袋（60kg）
②世界の総輸出	88,477,206袋（１袋 60kg）
③　①×②＝	3,609,870ドル　約36.1億ドル

ちなみに、世界の総輸出は、88,477,206袋（60kg）ブラジルは28,161,046袋（60kg）は世界輸出31,8%を占める。これがフェアトレード価格で売れたら、世界のコーヒー生産者は約148億ドル手にしていいのだが、コーヒー危機が叫ばれた2002年では、36億ドルしかない。その差実に4倍強金額にして、約112億ドルである。

フェアトレードでなくとも、それまででも、平均して生産国には、ほぼ毎年100億ドルの輸出収入が入っていたが、それと比べても生産者収入は60億ドル以上減ったのである。その減った分は、確実にこれまで生産者が取得していた分である。彼らの取得分がコーヒー生豆を買う企業側に「利益が移転」したのである。

もともと貧困な南の国のコーヒー生産者は、コーヒーの利益が減ったというより、「コーヒー企業に身を削られ、さらに生きることさえままならないような、飢餓と貧困」に落とされたのである。もしフェアトレードだったら、そのコーヒーの利益は、コーヒー農民のものである。



世界のコーヒーメジャー企業の年間取引量

■信じがたいほどのコーヒーの儲け

ではコーヒーを生産している生産者側の減った分のお金はどこに行ったのか。世界には、コーヒーの超メジャー起業が世界のコーヒー豆を独占して売買している。その彼らは大変な儲けをしている。

実際的に生豆の世界の輸入データから見ると、世界の超メジャー企業のクラフト社、ネスレ社、サラ･リー社、P&G社、チボー社など数社で、世界のコーヒー生豆の5割、6割を売買している。「コーヒー危機」のレポートからコーヒー労働者の貧困の様子など、ネスレなど超メジャー企業の儲けの資料などこの著作から多く引用している。

「インスタント･コーヒー：一杯の黄金」（2000年5月2日 ネスレ社ドイツ銀行アナリストのレポート）の記事を次に参考にする。

「ネスレ社のインスタントコーヒーは、全世界で毎秒3900杯が飲まれている。天国のような信じがたい利益を上

げている。とある。何百万人の人が黄金の豆を生産しているように見えながら、本当は深刻な貧困に直面している。」
　農家の絶望的な状況を次のように述べている。「みなさん　が楽しんでいる飲み物のおかげで、私たちはどうしようもない状態になってしまった。汗水たらして働いても何の利益にもならない」
このような状況で、世界のコーヒー業者は大儲けをしている。
　インスタントコーヒーは1kg当たりCIF工場渡し1,54ドルが小売りでは26,40ドルと計算されている。これは焙煎、インスタント加工、流通マージンを含むが17.1倍。
あまりにも世界的な多国籍のためその全貌が見えないというのが、識者の見解のようだ。ちなみに生豆に関していうなら、日本のコーヒー生豆輸入量は、年間約42万t、ネスレ1社の生豆の扱い量が年間78万tなので、少なくともネスレ社1社で日本国人口約1億2千万人全部のコーヒーの約2倍近くの生豆を取り扱っていることになる。
このようなコーヒーの扱いは、「天国のような信じがたい利益」と言っているのも、実に誇張でも何でもない、それは本当のことだろう。
コーヒーによる設けは凄まじく、生産者の正当にもらうお金が、強者の資本の論理でコーヒー市場を制覇し、強引に超メジャーコーヒー企業に資金転換してしまった。それだけコーヒー生産者と労働者はますます苦しむことになる。

III. フェアトレードは、世界に広がる

　フェアトレードは、1940年代にアメリカでオールタナトレード活動のNGO活動を源とする説もあるが、コーヒー労働や南の国で生産される農産物。労働の陰に虐げられる人たちを救おうとする1960年代にフェアトレード運動がヨーロッパで始まる。
そして1970年代、1980年代と世界の富める者と貧しいものの格差、世界の経済格差はますます広がるばかりの中、一方では飢えと貧困、戦争や飢餓貧困のない、不平等、不公正な国際関係をなくそうと、20世紀の終わりになり、フェアトレード運動はヨーロッパを中心に急速に盛り上がりを示してきた。
フェアトレード運動の歴史、欧米での活動の紹介をする。1980年代後半から、個別に活動していたフェアトレード組織のネットワーク化すすみ、団体が結成された。
特に長年の運動の教訓としてフェアトレード理念を守る運動だけでは、限界と認識される中、貿易を通じて、経済財政、経営基盤をつくりながら理念を広げる運動を行うようになった。
　1989年　IFAT　(国際オルタナティブトレード連盟)
　1990年　EFTA　（ヨーロッパ･フェアトレード連合）
　1994年　NEWS！　(第３世界ショップネットワーク)
　1997年　FLO　（国際フェアトレード・ラベリング機構）
　フェアトレードの運動は、1989年頃を境に国で独自な活動をしていた団体が団体の連合組織を作り始めた。IFATはフェアトレードを促進するための情報交換のフェアトレードの定義や基準を国際的なものさしをつくった。
　EFTAは商品に関することとして輸入、貿易業者やそこには生産者も入った連合組織。生産者との情報交換、より良い貿易のための結成された団体。
　NEWS！は販売のためにショップの3000店以上が加盟する連合組織。
FLOは、販売を大きくし、消費者へのフェアトレード商品の認知。他の商品との違い、そしてフェアトレードを明確にするために、共通なフェアトレードラベル発行機関である。
これらの組織が90年代にヨーロッパ各国を中心に結成され、フェアトレードは21世紀に入り世界の運動となりつつある。
　FLOのラベルフェアトレードは、南の国の人たちの作ったコーヒーなどの生産品や製品を公正な価格で買うことにより、製品を作る生産者、そこで働く人たち、地域の人たちの尊厳が守られる

ようにするためにフェアトレードラベルを発行する。
　2000年から2001年の21世紀に入り、世界のフェアトレード運動がさらに活発となって、イギリス生協はコーヒーやチョコレートはすべて、フェアトレードに切り変えた。
　スターバックスやマクドナルドもスイス店でコーヒーを一部フェアトレードに変えた。世界的多国籍メジャー企業のこのようなことは、30年、40年のヨーロッパのフェアトレード運動の歴史やフェトレード団体、消費者市民らの圧力があったことが直接的大きな要因だが、一方で彼らはフェアトレードをブランド企業のコマーシャルだと言う論争がある。
　いずれにしても現在ヨーロッパからフェアトレード運動が世界に広がっていることは間違いないが、日本では環境や南の国とのかかわり方の歴史の違い、国民の意識の違い、流通など多くの日本的な特徴がある。日本ではフェアトレードについては、まだ10年、20年の遅れである。大切なことは実践レベルでの「日本型フェアトレードの創出」が求められている。

■フェアトレードで農民と地域が変わる

「日本型フェアトレードの創出」ではないが、私はフェアトレードが南の国の農民を救うということを体験した。私は2002年ブラジルのポッソフンド訪問時に「フェアトレード」を生産農産地で聞いた。さらに2年後の再度の2004年訪問の時、この小農民組合は、劇的な変化だった。
フェアトレードでコーヒー農園の生産者の生活が向上し、コーヒー生産者一帯の地域が変わることを体験した。
　そのポッソ・フンドは、ブラジルミナスジェライス州の南に位置する所、南緯21,5度、標高840m～1435m起伏のある道路が続く所にある。数字に関しては、ポッソフンド村のデータに基づく。人口15000人強で大半が小農家で、月収入60ドル以下が41%、60ドルは日本円では110円（2002年の1ドル為替）としても6600円である。世帯の年間平均収入は12万円の貧困層の多いところだ。ポッソフンドのコーヒー農家はコーヒー専業ではなく家畜の肥育、他の農作物を作って生計をたてている。
　小規模農家は1895年に農家の経済や生活をよくするために、ポッソフンド小農民組合をつくった。「ポッソフンド」の意味は、「井戸の底」という意味らしいが、経済的貧困を表して名前を付けたのか、起伏が多い地形で付けたのか、勝手に想像されるような名前だ。
　そして、有機コーヒー栽培を学び始め、近隣の有機コーヒー農園から技術指導や援助も受けるようになり、1997年以降から有機コーヒーの生産を始めた。
組合員数は50ほど数えるが、その収量は全部の農家あわせても収穫は2～300袋（1袋60kg）もない状態だった。
　私が訪問した2002年6月は世界的コーヒー価格の大暴落の時、ブラジルの収穫は5月から始まり、6月、7月、8月と続くが、その時のコーヒー価格は、まさにコーヒー価格の史上最低を記録する。（表１）を参照してもらいたいが、安値が続き、収穫し乾燥、加工、調整が終わり、ちょうど豆の出荷できる状態が整った8月には、最低価格を更新する1ポンド24,78セントとなった。
　その2002年6月は「ブラジルコーヒー農園の悲劇」の一方、ブラジルは折りしも、「世界ワールドサッカーの決勝戦にブラジルが優勝した」時だった。私はその決勝戦の前日、サンパウロ空港に到着した。その決勝戦に合わせてブラジルに行ったのではない。たまたまだった。ブラジルとドイツの決勝戦の前日、サンパウロは燃えに燃え、そして次の日朝の試合（ブラジルは12時間時差）ドイツに勝ち優勝し喜びに沸き立った。
　空港にはロナウドなど有名選手のサッカー選手の大きいスクリーンがあった。まさにサッカー王国を感じた。ホテルで決勝戦をテレビで見ることができた。サッカー優勝の日は、サンパウロ中、日本では信じられないような歓声と爆竹、車の警笛、犬や鶏も一緒にびっくりして大騒ぎだった。市街戦が起きたかというような騒ぎだった。
　その翌日ミナス州のコーヒー農園に行ったが、その喜び浮かれ、騒ぎはまったく感じられない静かな村の風景。ポッソフンドでは、ブラジルのサッカーチームが優勝したという歓声はまった

く感じられない。小学生の女の子が黄色いティーシャツを着て、とても可愛いちょっと恥ずかしい表情、顔、仕草をしていた。ブラジルサッカーの喜びをブラジルの色の鮮やかな黄色と緑で表しているのがせめてものサッカー優勝を感じ慰めだった。

ポッソフンドの小農民組合の事務所は小さく、電気もなく暗く、若い女性が一人いただけだった。ポッソフンドのコーヒー生産量を聞いても明確な返事はなかった。幾つかの質問をしたが、彼女は組合の事務員というが、豆の出荷管理をしているという人なのに、事務所に勤務している人と思えなかった。

私に1袋（60kg）110ドルで買って欲しいと別な人が言ってきた。1袋（60kg）110ドルが、自分たちのコーヒーの原価ということだ。生産者にはコーヒー1袋(60kg)日本円で3,000円にもならないようだ。

私はこのポッソフンドで、フェアトレードということを強く意識した。別な興味がわいてきた。できることならポッソフンドの豆を輸入し、日本の消費者にポッソフンドのフェアトレードコーヒー豆として売り出したいと思った。

■ポッソフンドの豆がフェアトレードで売れた

ポッソフンド農民組合は、日本に輸出することを強く望んでいた。コーヒーはブラジルでは有機コーヒーと認証されているが、日本の有機JAS認証はなかった。JAS有機認証があるとコーヒーは高く買うので、有機JAS認証を取ることを伝えた。

しかし、ポッソフンドの小農民組合から、フェアトレードについて教えてもらったことはありがたかった。これまでのコーヒーの概念が変わった。私が見学した日本に輸出しているコーヒー農園は何百haのコーヒーのコーヒー農園である。それと比べ物にならないほど小さかった。ポッソフンドと連携し、彼らの一助になりたかった。

ブラジルから戻り、2,3ヶ月してメールがブラジルから届いた。それには何とポッソフンドの豆がフェアトレードで売れた。アメリカのフェアトレード団体に1袋168ドルで130袋売れた。ポッソフンドは大騒ぎになっている、というメールだった。一瞬6月に行った時のブラジルサンパウロのサッカー優勝の大騒ぎを思い出した。あのサッカーより遅れたが、コーヒーのフェアトレードによって歓喜がポッソフンドに来たのかもしれない。

ブラジルのポッソフンド訪問のコーヒー農園は、収入の当てを閉ざされ、ブラジル人のあの陽気さが感じられなかったが、フェアトレードで売れたことは、サッカー優勝の時のサンパウロでのお祭り騒ぎのような喜びだったろうと想像した。いずれにしても、1袋（60kg）3,000円だったのが18,000円で売れたのである。

ブラジルのコーヒー中堅農家は、100人程雇い、5～6,000袋の収穫を可能にしているが、このポッソフンド全部合わせても、中堅農家の10分の1にもならない。小農民の暮らしはコーヒーの価格で自分たちの一家の生計が大きく変化する仕組みにある。ブラジルのコーヒー農家はコーヒー価格に敏感で、コーヒー生産者にとっては、フェアトレードはあこがれの販売方法と映るのである。

ポッソフンドは実に小農家コーヒー生産者であるが、このポッソフンドを助けてきた中堅農家に2つのことを質問してみた。

1　あなたのコーヒー豆は、フェアトレードコーヒーということができるか。

2　ポッソ・フンドとコーヒー取引が増えると、結果としてあなたのコーヒーは減ることになるが、問題はないか。

それに対し、自分の農園は決して小さくない。フェアトレードは小さい農園との取引が基本なので、自分のコーヒー豆はフェアトレードではない。しかし、本当のフェアトレードは自分ではなく、ポッソフンドのような小さな農園です。彼らを自分は応援する。

ポッソフンドがよくなることがあれば、自分のところの豆が減ったらそれでもいい、と言っていた。フェアトレードは小さい農園を支援することや、働く人の権利を守ること、彼の農園では15歳以下の児童労働を禁止していること、農園内で雇用している労働者の子どもと、自分の子息と同じ大学で学べるようにしていること、など働く人の権利を守る立場である。

こんなことは、当たり前と思う人もいるかもしれないが、コーヒー農園での労働は過酷な労働で、もともと奴隷や移民を使っていた労働の歴史で、働く人への人権尊重は、今でも弱いブラジルコーヒー農園で、篤志家のコーヒー農園主がいたから、ポッソフンドのコーヒー農園がフェアトレードで売れた。彼は世界のフェアトレードについてよく学んでいた。そのような彼だから、自分のことはさておいてポッソフンドがよくなることを望むということだろう。その彼からもフェアトレードを学んだ。

●ポッソフンド　コーヒー生産者小農民組合
1990年環境問題などの学習をし、有機コーヒー生産のための勉強を始めた。
1997年以降有機コーヒーの生産に励む
　　ブラジルのAAOに参加（Agriculture Associate Organization）
2002年　アメリカのフェアトレード団体に130袋（60kg）初めてフェアトレードで売れる
2004年　有機JAS認証

農家のコーヒー耕作面積は2002年の時の小規模農家

コーヒー耕作面積(ha)	組合員数
～2	29
2～4	18
4～10	4
10～20	3
20以上	2

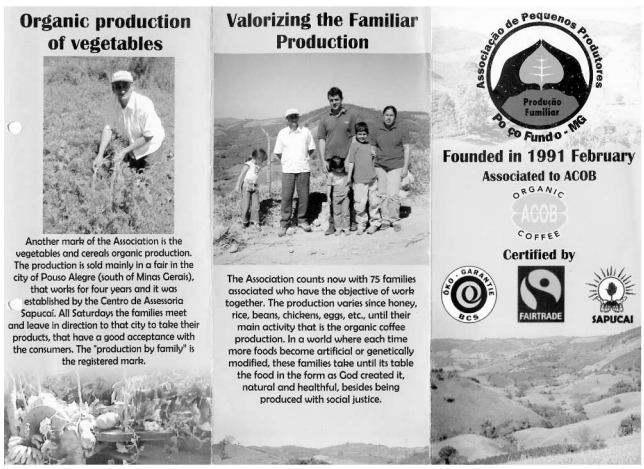
ポッソフンド村からの資料

（駐：ブラジルではポッソフンド耕作面積は、小農民の生産者になるが、私は後にスリランカに行くようになるが、もっと貧困で耕作面積が少ない農民がいることを知った。スリランカでは、小農民はコーヒー農園は持っていない。コーヒー生産は、「ha」でなく、「コーヒーの木の何本」というほど小さい貧困な農民が多くいる。）

■フェアトレードで変わったポッソフンド

フェアトレードでコーヒーが売れたポッソフンドに、2004年6月に再度ポッソフンドを訪問した。2年前と何と違うことか。フェアトレードで地域を変えるというが、こんなにも変わるものか、というのがまずの私の感想だ。

2002年にフェアトレードで売れて、2003年にもアメリカのフェアトレード団体がその価格で売れた。



ポッソフンドの紹介リーフレット

2004年もすべてのコーヒー収穫に注文買い付け予約が入っていると言うことである。そして翌年2005年のもまたアメリカのフェアトレード団体の全数買い付け先行予約があるとのことで、安心して農家はコーヒー生産に励むことができる。

フェアトレードの大切なことがだが、フェアトレードは継続的な取引を一つの前提条件としていることである。商社は継続的取引でなく、すぐに自社に有利と思われるところに変わっていく。フェアトレードは一回買って、次は知りませんと言うことはない。毎年継続して買うことがフェアトレードである。

まずびっくりしたのは、2年前訪問した時の陰気くさかったそのポッソフンドの小農民組合が事務所を新しくし、場所が変わり、明るかった。その訪問では、その部屋でポッソフンド村長、農民組合長はじめ主要な方々が私たちの訪問を待っていた。

以前は村長さんどころか、組合長にも会わなかった。今回はポッソフンド小農民組合長さんの丁寧なコーヒー農園案内や村長さんの庁舎への案内など歓迎してくれ、ポッソフンドはコーヒーがフェアトレードで売れて、3年間にどんなに変わったかを説明してくれた。

フェアトレードでコーヒーが売れてから、生産意欲が高まり組合員数も、2年前の50人から150人に増えた。またどんどん増えつつある。

女性事務員は2人となり、一人は前に私が訪問した時に会ったことのある女性だった。その事務所にいた若い女性がそのときと見違え、実に生き生きしていた。

組合長のルイス・アダルト・オリベイラさんは、コーヒーの売れた金額の1俵当たり20ドルを組合経費にし、子どもたちの教育施設の充実、歯科診療所の開設、高齢者の対策などの費用に当てる、と自信を持って語っていた。

2年前の訪問から何と言う変わりようか、私はフェアトレードが始まる前とそれ以後を訪問することで、フェアトレードの効果をまざまざと実際に感じることができた。

ポッソフンド組合のカラーリーフレットができていた。これまた驚きである。以前には信じられないことが起きている。そこにはFLOのフェアトレードマーク、ポッソフンド村のマークと収入の安定した家族の落ちついた平和な写真を見ることができる。

ブラジルはあの広大な国で、圧倒的な世界最大のコーヒー産地である。そのためにすでにコーヒーについては、すべてにわたりノウハウは持っている。ただ、数少ないのが有機無農薬の豆とフェアトレードであった。そのブラジルでフェアトレードコーヒーポッソフンドを経験し、私の心は次のフェアトレードの課題はスリランカに移る。

■スリランカ「幻のコーヒー」

スリランカは紅茶の産地である。セイロン紅茶として有名なので、現在誰しもそう思っている。スリランカ人もそう思っている。ところが、スリランカは紅茶でなくて、実は140年前までコーヒーの一大産地だった。世界でも最も早くに栽培がされていたという事実から、私はフェアトレードの原点を探り始めた。

フェアトレードとは、公正貿易と言われるが、それなら公正でない貿易もあるのだろうか、と疑問を持つが、少なくとも私なりに、コーヒーをフレームの原点にしてフェアトレードを見ると、見えてくるものがあるように思う。

フェアトレードを簡単に言うと、ものは出来上がった商品でなく、生産から消費者までのプロセスチェックが大切だ。南の生産地との関係をコーヒー貿易が始まるプロセス（道のり）に、フェアトレードを理解するヒントがあるのではないかと思う。

日本国内で産直があるが、フェアトレードはある種の世界の生産地と海を隔てた消費地の「コーヒー産直」とも言えるだろう。コーヒーは地球の北緯、南緯25度の範囲内でしかできない農産物、コーヒー生産ベルト地帯から世界の消費国に輸出される。

そんなコーヒーは南の国の産物で、ほとんどがメジャー商社を通して輸入されている。そのことからも商社を通る一般的な流通経路と、それによらない流通の生産者地域が特定されるフェアトレードについての違いがある。現代はコーヒーが日常化しているが、戦後まではコーヒーは日本人に飲む習慣はなかった。現在も以前もおそらく多くのコーヒーを飲む人たちに、コーヒーの生産地について知ることはなかったであろう。しかし昨今通信手段やメディアの発達により、写真や映像でコーヒー農園を知ることができるようになった。

そのような現代の情報社会は、生産から消費者までの流通の総点検が可能な時代である。「グローバル社会、情報インターネット社会」は、ほんの10年前までならば信じられないことだが、12時間時差の地球の反対側のブラジルとも一瞬のうちに情報交換ができる。写真、映像もあって、そ

のリアル感や情報の正確さと、双方向性はフェアトレードにまさしく貢献する時代に突入した。
　生産者側と消費者側の距離が近づいたことである。この情報化時代の到来により、生産地が外国であっても日本とダイレクトに結ぶ人間関係も含めて、商品や製品の交流や交換、トレードができることになった。貿易は国家レベルの大手商社しかできないものだったが、現在私たちのような小さい会社ですら、コーヒーの貿易をしている。現代の情報社会によって庶民の手によるコーヒー貿易ができるようになったのである。そこにフェアトレードが生まれるシステム上の環境ができた。
　また、フェアトレードは、生産地情報を多く提供するが、大儲けするコーヒー企業は、自分に都合の悪くなるようなコーヒーの現地情報は無視してきた。というよりコーヒー販売上必要がなかった。コーヒーを生産地から購入し、消費流通経路を持ち、独占的にコーヒーを販売する企業は、コーヒー消費者には、コーヒー生産者側の生活についてなど何も知らされてこなかった。
　コーヒーとは、そしてそれを生産する南の国の遠い所にあり、余りにもコーヒー生産地側について知られていなかったが、コーヒー生産地の生産者と消費地の人たちと平坦な関係を結ぶのがフェアトレードである。

■フェアトレード運動の発展へ

　現在世界では年間コーヒー約672万ｔ（2004/5年）が生産され、消費国への輸出約412万t（2004年）ICO統計（国際コーヒー機関）が貿易されているが、このように巨大な貿易に至ったコーヒー生産の歴史と、その生産を支える働く人たちがいることを、振り返ることが大切ではないかと思う。
　生産地側のコーヒーについては知られていない現実であることは先に述べたが、その訳は幾つかあると思う。
　その一つに日本の消費地からは南のコーヒー生産地は遠くにある。
特に最大のコーヒー産地南米ブラジル国に行ったとしても、コーヒーの樹は山の方にあるので、余程目的や用事がない限りコーヒー園まで見に行かない。
　日本には南の農産物が多く輸入されているが、消費地側にいる日本では、南の国で生産されている生産地側の情報への関心も薄い。
　生産者側でコーヒーの価格が大暴落しても、コーヒー農園がつぶれても、コーヒー労働者がどのように貧困でも、飢餓が理由で病気になり亡くなっても、何が起きても、私たちコーヒーを飲用する側の人は知らない。
　実は私もコーヒーを喫茶店で飲むくらいの知識しかなく、コーヒー農園の地を訪ね、初めて知ったようなものなので、あまり大きなことは言えない。
　ところで、コーヒー生産地側に行くようになってからコーヒーから多くのことが見えてきた。ただ驚いたことに、日本人にもコーヒー農園で働いた人がいた。しかし、実際彼らを待っていたコーヒー農園の生活は稼ぎどころか、命まで亡くなる人が出る悲惨なコーヒー農園生活だった。さらにコーヒー移民労働者の前の歴史をたどると、そのコーヒー農園労働者は原住民かアフリカから売買され連れてこられた黒人奴隷であった。
　南の国は欧州のスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスの国々によって、数世紀にわたり植民地化された。その植民地化されていたところが現在のアフリカ、アジア、中南米のコーヒー生産地でコーヒー農園は、現在も貧困のまま続いている。

　生産国のコーヒー農園に行くと、余りにも消費国と生産国の社会の経済格差を見る。貧困な生活、食べることすらできない、一方では捨てるような消費社会、それこそ世界規模での不公正、不正義である。
　フェアトレードは、それを解決するための運動だ。コーヒー農園経営者とコーヒー労働者、その家族、地域社会を守る運動としてのフェアトレードを発展させることがたいせつである。